

軍隊と韓国男性

——兵役が韓国男性に与える影響——

春木 育美

HARUKI Ikumi

1. 研究の目的

「軍隊に行って、初めて人間になった」。この言葉は、韓国社会では一つの社会通念となっている。国民皆兵の原則に基づく徴兵制度¹⁾を敷く韓国では、大部分の若者は例外的理由がない限り、一定期間軍隊に服務することが義務づけられている。韓国ではほとんど誰もが、自分の兄弟、息子、友人を軍隊に送った経験を持つ。このような共通経験は、ある側面では、国民的一体感、連帯感、親近感形成に大きく寄与するものといえよう。軍隊には、国防意識や愛国心の形成だけでなく、国民意識の形成と深く関連する社会の規律化、標準化の役割を果たす機能があるからである。

韓国の青年は軍服務期間中、軍隊という特殊な集団組織において再社会化²⁾され、新たな価値観と行動規範が植えつけられようになる。軍隊のように特殊な目標を持つ組織では、家族から空間的、情緒的、心理的に分離され、統制・規制された環境下で既存の価値観や生活態度の変化を要求されるため、再社会化は加速する。軍隊生活は、韓国の青年に相当な生活の変化を与え、いかなる組織よりも厳格な規律と秩序が強調される環境に適応することを強要する。この過程において、入隊前の価値観や人格、個性、習慣等に、軍隊文化が影響を与えるようになり、新たな価値観や、生活態度、規範が形成され、それが内面化されるようになると考えられる。

軍隊での再社会化は、果たして韓国の青年にどのような影響を及ぼすのであろうか。社会から隔離され、厳格な規律と秩序の中で行われる軍隊生活は、個人の価値観と生活態度にどれほど大きく作用し、その意識と行為にどのような変化をもたらすのだろうか。軍事訓練や兵営生活から韓国の青年は何を得るのか。以上について明らかにすることが、本研究の目的である。

2. 調査対象と分析の枠組み

韓国の場合、大卒以上の男子の社会化過程は、基本的に高校→大学→軍隊（→大学に復学）→就職の順に行われるとみなすことができる。（同年齢の日本の若者が、高校→大学→就職の順で社会化がなされることを考えれば、この点において、両国の若者は互いに非常に異なる社会化過程を経るといえよう）

本論文では、調査対象を、大卒以上の学歴を持つ高学歴集団に選定した³⁾。同じ兵役でも大学在学以上の高学歴者の場合、服務形態は大きく分けて4種類ある。最も一般的な現役兵、期間が1年半と短い短期（防衛）兵、少尉として任官する将校、在韓米軍に配属される韓国軍「KATUSA (Korean Augmentation to the United States Army)」である。本論文は調査対象者を大卒以上の除隊者に限定したため、軍服務が及ぼす影響をより正確に分析するために、1) 現役兵⁴⁾、2) 短期兵⁵⁾、3) KATUSA⁶⁾、4) 将校：ROTC (Reserve Officers Training Corps)⁷⁾の、4つの類型に分類して分析

を行う。

軍隊服務形態別に区分して接近する理由は、従来の研究を整理してみると、軍服務者の意識を分析する場合、年齢・教育水準・生育地、軍体験〔大学生（兵役未終了者／現役兵役終了者）、社会人（兵役未終了者／現役兵役終了者）、現役兵を対象にした研究はあるものの〔高麗大学校行動科学研究 1979、金ギソク 1980、金ドンヒョンほか 1985、ペクギソン 1981、金サンジュ 1989〕、軍服務形態別（現役兵、短期兵卒、KATUSA 等）に細分化、分析した研究が見当たらなかったためである。

将校と KATUSA の場合（KATUSA の場合は、在学中の大学生以外から補充される者もいるため例外もある）、在学中の大学生以上の学歴を持った構成員で補充され、現役兵とは異なる形態で軍隊内の再社会化が行われる。また、現役兵、将校、KATUSA は軍部隊内で生活する反面、短期兵士の場合は、基本的に自宅からの通勤となるため、他の集団に比べ、いくらか弱い統制の下で生活することになる。

このように服務形態によって再社会化過程や、内面化される価値や態度に格差が生じうることを考慮し、本論文では服務形態別に 4 つの集団に細分化し分析する。軍服務で生じる心理的昀藤を射程に入れつつ、軍隊での服務経験が、韓国男性の意識にどのような影響を及ぼしているか考察してみることにする。

軍隊は、様々なタイプの人間が無作為に集められた集合体であり、また環境的背景の異なる人々が徴兵され、形成された組織であることから、各種統計や基本水準を設定することは、どの集団よりも多くの困難を伴う。同じ軍服務でも KATUSA の場合は極少数を除き、大部分が在学中の大学生で構成されているため、教育的背景や年齢などにおいて、非常に同質性の高いグループであるとい

える。ROTC や学士将校グループも、教育的背景において同質性の高いグループである。

また、服務類型によって、与えられる役割や勤務条件、役割昀藤や上下関係からくる昀藤など、心理的な昀藤要素がそれぞれ異なるため、軍隊を研究対象とする場合には、軍服務形態別に細分化することが、より正確な分析のために必要であると思われる。

3. 調査方法

調査対象を、軍隊を除隊した 24-34 才までの大卒の男子とし、1994 年 1 月から 1995 年 6 月中旬までの間に、92 名〔現役 32 名、将校 20 名、短期兵士 20 名、KATUSA 20 名、平均年齢は 27.8 才〕に面接調査を行った。調査内容は、面接者の特性に関する質問として、年齢、入隊時期、出生地、成長過程、大学の専攻、最終学歴、軍服務形態、該当兵科、服務地域について質問し、軍隊経験に関する意識調査として、軍服務経験の肯定的影響、否定的影響、その理由、軍服務形態によって異なる心理的昀藤要素、軍服務が韓国社会に及ぼす影響、組織生活に及ぼす影響などを調査した。

また、併行して文献調査を行い、補足説明として調査結果に加えた。

4. 調査結果

〔1〕軍服務経験と心理的昀藤

〔1〕-1 将校集団の昀藤

一般的に ROTC 制度に対しては、「大学内への軍隊文化の移植」「硬直した権威主義的文化の浸透」などの批判がみられる。軍事独裁政権が長く続いた韓国では、軍に対しては否定的な見方をする者が少なくない。それゆえ、ROTC に対する他学生の視線もまた、好意的なものばかりではない。ROTC になると、一定期間、他学生とは別に

軍事学などを学ぶようになり、規律に束縛された生活を送らなければならないが、制服、帽子、短い頭髪、アタッシュケース、叫ぶような挨拶などの ROTC 独特の文化は、彼らを一般の学生とは違った行動を取るよう導いていく。また、ROTC だけが享有している文化様式に関する排他性は、彼等を小エリート主義に陥らせる危険も内包している。

ROTC として軍務をする場合、大部分は入隊前にあらかじめ内定していた企業に、除隊後すぐに入社するようになる。そのため、他の大卒以上の現役や短期兵士出身集団よりも、企業組織における新たな再社会化過程に困難を伴う可能性が高い。現役兵よりも長期間にわたり、軍隊での再社会化過程を経たにもかかわらず、その間に体得した軍隊文化や思考方法を転換するための十分な準備期間なしに、新たな組織に移行し再社会化を迫られるため、役割昞藤が生ずることがあるからである。

「現役兵として勤務した者は、除隊後に大学に復学するので、再度勉強し、実力を蓄える準備期間が持てる。だが、ROTC は大部分が除隊するとすぐ企業に入社するので、固くなった頭を回復する準備期間なしに新たな価値観への適応を迫られる。入社当初は頭が混乱し、適応するのに苦労した」[29 才 会社員 1995 年 2 月 1 日インタビュー]

「ROTC として軍務することにより、人を統率する能力を涵養できるが、惜しむらくは底辺で仕事すべきところを、早くから指導者として勤務することだ。これはその後の組織生活においては、末端から始めなければならないため、適応に困難をもたらす。だが一方では権力志向が肯定的に作用し、それが昇進への原動力とも

なりうる」[L 商事 人事部長 1994 年 3 月 2 日インタビュー]

ROTC の場合、その長い訓練期間ゆえに、組織適応能力が最も高められた集団といえるが、企業組織では、将校という中間管理職的な指導的地位ではなく、末端の地位から始めなければならないため、昞藤の度合いが高くなる傾向にある。

また、ROTC 出身者は除隊後、将校癖が抜けないうの指摘を受ける場合もある。例えば、「同じ言葉でも命令口調になりやすい」「序列意識にこだわる」などである。

ROTC に対する企業の選好度は非常に高く、1991 年から 1993 年の間の就職内定率は、平均 90.5% であった。だが、近年将校に対する優遇の度合いは薄れつつある。これは将校が好まれた理由であった服従心や規律正しさ、組織管理技法、リーダーシップに対する関心が、相対的に低下したためとみられる。その背景として、経済のグローバル化や、先端科学の発展、それに伴う高度の専門的知識を有する組織構成員獲得の重要性の増加、コンピューターをはじめとする、先端機器の運用能力や外国語能力などが、より重要な要素として評価されるようになったことなどが挙げられよう。

ROTC の特徴は、同質的連帯感や親和力が強いということである。特殊な集団であるがゆえに、軍隊生活の過程において自然に同質的連帯感が形成され、集団への強い帰属意識や、厳格な先輩・後輩関係が形成されるためである。これは人間関係ネットワークが特に重視され、効力を発揮する韓国では、重要な関係資源として、その後の社会生活にプラスに転用されることが多い。

「飲み屋で ROTC の制服姿で飲んでみると、頼んでもいないのにビールが何本もテーブルに届

いたりすることがしばしばあった。同じ店内で飲んでいた ROTC 出身の先輩が、後輩達にと差し入れてくれるのだ」[25才 会社員 1995年 2月4日 インタビュー]

「学園祭などで企業の後援を頼みに行き、担当者が同じ ROTC 出身だったりすると、話はすぐまとまる」[26才 会社員 1995年1月20日 インタビュー]

「上司が ROTC 出身だと仕事が格段にやりやすくなる。通じ合うものがあるからだ」[27才 会社員 1995年5月2日 インタビュー]

ROTC 出身者は全般的に軍隊での服務は誇るべき良い経験であったと考える傾向が強く、大韓民国の将校であったという自負心を持っている。そして、将校としての徹底した訓練を受けたことと関係するのか、概して責任感や愛国心が強く、思考が健全な面がある。その理由に関して、ある ROTC 出身者は次のように説明している。

「責任感は状況によって涵養されるものだ。[私は] 40人あまりの部下を指揮していたが、事件が起きたり、部下が怪我をすると自分の責任になるので、当然責任感は強くなる。責任感を持ち、リーダーとして部下を指揮した経験を誇らしく思う」[28才 会社員 1995年3月13日 インタビュー]

「部下たちをうまく率いていかななくてはならないため、自然と思考が健全になる。また、ROTC は社会に出て、学歴からして、社会の核心勢力としての地位を占める人材であるから、自らリーダーとしての健全な思考や愛国心を養おうと努力するようになる」[29才 会社員 1995年

1月24日 インタビュー]

[1]-2 KATUSA の罇藤

韓国社会に存在する反米感情⁸⁾は、兵営内で KATUSA と米兵間に多くの罇藤、あるいは摩擦を起こす要因となってきており、特に KATUSA は軍隊内で、文化や成長過程の相違による価値観の違い、指揮統率に対する二重性、処遇の不均衡、絶対多数の米兵に対する少数集団としての心理的萎縮感などを経験することになり、新たな反米感情を内含しやすい集団であるといえる。

まず、KATUSA の多くが、部隊配属と同時に、国力の差や、文化の異質性、言語障壁を感じるようになるという。学歴による序列意識の高い、韓国ならではの問題点もある。90%以上が大卒や大学在学者である高学歴者の KATUSA は、高卒以下が大多数の米兵から、人種差別的または個人的に侮辱を受けると、ささいなことで、自尊心が傷つくことがある。また、KATUSA の側にも教育水準の低い米兵を無視する感情を抱く場合があり、これが罇藤の一因として作用する。

「KATUSA はそれなりに、エリート集団という自負心があるため、米兵の大国意識を露にした優越感に対峙すると、非常に自尊心が傷つく。KATUSA 側も学歴水準の低い米兵を見下すので、さらに壁が厚くなり、罇藤が激しくなる」[26才 会社員 1995年3月14日 インタビュー]

入隊動機、部隊所属感、指揮系統の構成などの点において、背景の異なる二つの集団が共通の目標を追求するのは容易なことではない。米軍兵士との間に信頼感を構築する例も少なくないが、組織内の同志という意識よりは、むしろ互いを異質な集団と認識しやすく、時にはそれが対立感情に

結びつくことがある。

「意思疎通が不十分なため KATUSA は不利益を被りやすい。問題発生時、向こうの落ち度をうまく米軍側に理解させることができず、損害を被ることがある」〔27才 会社員 1995年3月3日 インタビュー〕

「規則の上では、KATUSA は同じ階級の米兵と同一の待遇を受けるようになっている。しかし現実はそのようではない。KATUSA の兵長が米軍の一般下級兵士に命令しても無視されることがほとんどで、これが命令違反にならない」〔アンギソク・チェソンヨン 1988「駐韓米軍40年」月刊新東亜7月号 571ページ〕

「米軍の連中は KATUSA が仕事を頼んでもやってくれない。おまえらの階級はでたらめだと言うのだ。腹が立つので KATUSA 側も米兵が頼んだ仕事をわざとやらない。だから争いになる」〔26才 大学院生 1995年5月8日 インタビュー〕

意思疎通の難しさ、階級構成および昇任制度の違い、入隊動機、および軍事的目的に対する相違点、二重の指揮系統などの運営上の問題、韓国社会で提起されている米軍に対する問題点などの側面が複合的に作用し、さまざまな罅の要因となる。その結果、除隊後には多くの KATUSA たちが、他の軍服務者とは異なる民族主義的傾向を帯びるようになる側面がある。

「おまえ達は我々の力で生きている。我々がおまえたちを守ってやっているんだという、大国の優越感を盾にする米兵と衝突することが多かった。KATUSA 出身者は除隊後、大部分が民

族主義者になるというが、その理由がよくわかった」〔28才 会社員 1994年11月14日 インタビュー〕

「米兵と対立するたびに、KATUSA と米兵との対立構造が、我が国と米国との関係と重なってみえた。つまり、米軍より劣勢であるがため無視されたり、蔑視を受けたりする自分たちは、米国に対する我が国の姿と同じだという気がしたのだ。我が国を早く世界一の大国にし、米国を追い越さねばならぬという競争心が強くなった」〔25才 大学生 1995年5月8日 インタビュー〕

「KATUSA の存在は、非常時における米軍と韓国軍の橋渡し役となり得るが、逆に米軍に対して強い反米感情を持ち、対立する集団となるだろう」〔27才 会社員 1995年3月14日 インタビュー〕

韓国のエリート層の KATUSA たちが、軍隊経験を通して否定的な対米観を形成するようになることは、KATUSA たちの心理的罅は、韓米関係において、逆機能的要素として作用する可能性があることは否定しがたいのではないだろう⁹⁾。

しかし、KATUSA たちの抱く最も大きな罅は、KATUSA に対する、韓国社会の否定的な認識である。韓国社会に KATUSA は「米軍の傭兵」、または「米軍の防衛兵」という見方が存在するのは事実である。このことが、米軍部隊内での罅とともに、KATUSA に二重、三重の精神的苦痛を与えている。これは次のような KATUSA たちの言葉に集約されている。

「韓国社会では、米軍の防衛兵とかヤンキーの

傭兵と言われ、米軍内では KATUSA という立場ゆえの尻藤が激しく、KATUSA 同士では序列が明確な韓国軍特有の上下関係や古参兵による干渉などに揉まれ、結局、三重苦だった」

(1) - 3 現役兵士の葛藤

現役兵 (KATUSA を含む) の場合、他のどの集団よりも喪失感や相対的権奪感を強く感じる傾向にある。免除は「神の子」、防衛は「将軍の子」、現役は「人の子」、または「暗闇の子」という、韓国でよく言われる言葉が、それを端的に表している。このような喪失感が強く作用するのは、軍隊に強制的に「引っ張られた」という意識が根底にあるためとみられる。

「韓国男性であれば、誰しも入隊前の晩を忘れられないものである。友人との酒の席で、あるいは恋人との別れの路地で交わした幾多の語らい。床屋の鏡に移った自分の短い髪を見つめながら、俺はなぜ軍隊へ行かねばならないのか、という疑問が沸き起こる。懸命に祖国の分断状況を思い浮かべ、自分を納得させようとする。しかし、どうしても引っ張られていくという思いは拭えない」〔ある除隊者の手記、KATUSA 出身、延世大学4年生〕

現役兵士は特に、軍隊生活は自分の人生の空白・喪失期間であると考えやすく、自分が達成しようとした目標への接近を遅延させる、意味のない期間と考える傾向が強い。現役兵士の場合、軍服務は自発的かつ積極的な選択ではなく、国民の義務として服装を余儀なくさせるものである。また、一定期間のみ軍隊組織に所属する生活であり、もともと軍隊生活自体に対する兵士の動機水準が低いため、消極的かつ受動的な服務姿勢を招く可能性が高くなる側面がある。

「長い受験地獄から解放され、意欲にあふれ、創造性を養う時期を、厳しい統制下の軍隊という組織の中で浪費するこの虚しさ」〔27才 大学生 1994年11月29日 インタビュー〕

「最も頭脳の動きが活発な20代前半の青年を強制的に徴集し、空白期を与えるということは、国家全般の頭脳競争力に莫大な損害を与えるものだ」〔29才 会社員 1995年2月22日 インタビュー〕

軍服務に対する相対的権奪感は、軍服務に対する受動的態度を招き、結局、除隊後も軍隊経験を肯定的に考えるよりは、「青春を無駄に過ごした」といった喪失感を抱きやすくさせる。根絶されない兵務の不条理¹⁰⁾も、喪失感や相対的権奪感を、さらに深刻化させている。

「結局、俺は金も縁故もないからこのまま引っ張られていくんだな。防衛兵にでもなれたらよかったのにと何度思ったことか」〔29才 会社員 1995年3月14日 インタビュー〕

「現役で軍隊に行く者は、金も後ろ盾もないやつということを否定する者はいないだろう。そこがまさに、緑の軍服に包まれた悲しい物語が始まる出発点となるのである」〔ウォンジョンロク 1993『兵営25時』世界文化社 15ページ〕

また、兵役免除者は23~4才で社会人になるが、現役兵出身者たちは、個人差はあるものの、たいがい26~7才で社会人になる。職場によって軍服務期間を勤務経歴として認める場合 (主に金融機関) と認めない場合 (主に一般企業) がある。したがって、一般企業に就職する場合、大学入学年度が同じ同期生であっても、軍服務をしな

い者や、短期服務者に比べ、どうしても昇進や昇給面で遅れをとることになる。会社側では服務経歴を6か月、また1年しか認めず、最近はまったく認めない所も多い。公務員試験の場合は、軍隊期間を点数化し加算点として付与する制度があるが、民間企業では、適用されない場合が多い。こうした点もまた、現役兵たちの喪失感や相対的憊奪感を甚しくする要因となっている。

だが、韓国男性の多くが現役兵として軍服務をするため、軍隊経験は社会的背景を異にする韓国男性たちを結合させる大きな共通体験となっており、心理的共感や連帯感を促す作用を果たす側面がある。その例は、

「出身地域も学歴も異なり、まったく共通の話題がない相手でも、軍隊の話をすれば盛り上がる」

「男は軍隊、女は出産の話を始めると、夜が明ける」

「酒席で最も手軽で、話しやすい話題は、軍隊での苦労話。誰でも必ず話したい経験談があるからね。たまたま同じ部隊だったことがわかった日には、もうすぐに親友になれる」

といった日常的に交わされる会話に、象徴的に示されている。

[1]-4 短期兵士の葛藤

短期兵士の生活は、まず基本的に家からの通勤となるため、軍服務と社会生活という、二重生活を送るようになる。営内・営外生活に分離される二重の領域内で軍隊生活を送るため、相対的に部隊への所属意識は低下する。また、半分は民間人で半分は軍人であるという一貫性の欠如した軍生活により、軍人としての責務をまっとうするという意識は希薄化する傾向がある。

「防衛兵には防衛根性というものがある。これ

は責任を回避しようとする態度である。何かあっても、どのみち退勤してしまえばそれまでだからだ。私はこの防衛根性が嫌だったが」[32才 大学院生 1995年1月22日 インタビュー]

その結果、異なった形態の軍服務をしている同僚の兵士や一般人から、「軍人らしくない軍人」という烙印を押されることが少なくない。

現役兵と共に生活する部隊防衛兵の場合、部隊によって程度の差はあるが、短期兵士であるという理由で、幹部や指揮官または現役兵から冷遇、無視されることがあるのは事実である。

この問題は時として、現役兵と防衛兵との対立という形で表面化することがある。だが防衛兵は、その性格ゆえ、絶対的に現役兵よりも劣勢にある。

現役兵との間の相互対立感情が発生した場合、現役服務でないという負い目も作用し防衛兵は非常に弱い立場になる。このため、心理的屈辱を抱きやすくなる。

短期兵士に選抜される理由が、主に健康上の理由や家庭的事情にあるため、彼らに対する否定的偏見がみられることもある。例えばこれは「娘の夫には、防衛兵は避けたい」という娘を持つ母親の言葉などに端的に示されている。そのため、時として、自分に対する自己卑下的な思考が生じることもある。これは、日常の対話の中での防衛兵らに対する、「現役でないということは、何か問題があるのではないか」「後ろ盾やバックがあったから」「金で何とかしたんだろう」というような、疑いや嫉妬心と無関係ではないと思われる。

「入隊前は現役兵を逃れられたら、防衛兵になれたらと願ったが、軍服務中や除隊後に迫りくる偏見は煩わしいものだった。言葉には出さなくても大部分の防衛兵出身者は、程度の違いは

あれ、漠然たる劣等感や引け目を感じていると思う」[30才 会社員 1995年4月24日 インタビュー]

また、テレビ番組の中で短期兵士を戯画化することも起こっている。

「私は防衛兵として軍服務を終えた一家の主である。ところが最近、某放送局のコメディ番組のせいで、自尊心が傷つけられ、子供たちの前で恥ずかしい思いをした。防衛兵がコメディの素材として、笑いものにされているからである。息子はそれを見て、お父さんも防衛兵でしょと言って笑った。咎めはしたが、非常に恥ずかしい思いをした。国家の召集に応じて軍隊生活をしたのに、コメディのネタとして笑われてばかりでは胸が痛い。防衛兵もれっきとした軍人であることを認めるべきである」[東亜日報への投稿 1995年3月23日]

結局、短期兵士は、全面的に営内生活に縛られることなく、相対的に自由な生活が可能であり、特に軍隊生活期間が短いなどの理由により、入隊当時は短期兵士服務を志向する人が多いが、実際の服務経験を通して感じる様々な否定的偏見のため、程度の差はあれ、短期兵なりの昴藤を抱くことが少ないといえよう。

[2] 軍服務が及ぼす影響

軍服務の肯定的な側面として、強い精神力、適応力、社会性、協同心などの涵養を通して、社会や組織が必要としている条件を学ぶ期間になったという肯定的見解が多くみられた。「社会・組織生活に軍隊経験が役に立ったか」という質問に対しては、ほとんどの者が同意をしており、これは他の調査結果でも裏付けられている結果である。

[高麗大学校行動科学研究所 1978 金ドンヒほか 1985 ペクジソン 1981]

ただ、軍服務の否定的側面においては、服務形態に関係なく、ほぼ同じ見方がされていた。最も多かった回答は、「時間の浪費」であった。画一的な上意下達体系、自律性が奪われる体制下での軍隊生活は創意性や自発性、独創性を育成、発揮する余地のない、無駄な時間であるという見方である。

本来軍隊は、上意下達式の命令体系により運営され、軍組織の特性上、画一的、集団主義的思考を強調しながら軍人を統率する体制になっている。しかし、このような軍隊の特性は、とすれば兵士に受動的な生活態度を持たせ、創意性や自発的思考を妨げる逆機能効果を招く可能性がある。

軍服務は、組織生活に対する順応性は高めるものの、現代社会が要求する創造性、応用力、柔軟性、自発性は学びにくく、体制順応型の性向を持つように導く側面があることを、多くの者が指摘していた。進歩主義や創意性よりは、服従する習慣が養われ、保守意識が拡大再生産される可能性が高いということである。

韓国社会で日常的によくいわれる「軍隊に行っただけで人間になった」という言葉の意味については、「成長した」「これで一人前」「現実的になった」「組織順応力が養われた」という、通過儀礼的としての意義を軍服務に見出している者がいる一方、「突出した行動をしなくなった」「軍隊は既成世代を作って社会に送り返す」「個人はあまりに微弱な存在であるということを実感した」「抽象的傾向や過度の観念性が消え、考え方が保守的になった」との見方もあった。

軍服務経験が組織生活に及ぼす影響については、逆機能的側面と順機能的側面があることが分かった。要約すれば、以下のような側面がある。

表1 軍服務経験が組織生活に及ぼす価値と態度

	順機能的側面	逆機能的側面
組織体系に対する反応	命令、組織系統での経験が、組織に対する適切な対応へとつながり、下部構造に対する理解度を高め、組織体系に関する概念が確立される	命令・指揮系統で動く軍の特性により、上下に硬直した組織体系に染まりやすく、命令や指示に服従するよう体質化される
組織文化への適応	組織文化に容易に適応しうる能力を涵養し、組織内の適応度を高める 軍服務を通して組織生活の規則および姿勢、節制や忍耐力を習得できる	軍組織の特性上、集団主義、全体主義、命令体系が強調されるため、軍隊生活を通して受動的な生活態度に馴染みやすくなり、上から言われたことしかやらなくなる。
組織生活への影響	様々な背景を持つ人々と団体生活をするところから、チームワークを重視するようになり、協同心や円満な人間関係等の社会性を養うことができる	上意下達式に運営される、一方的かつ画一的な意志疎通システムの組織体系の中で3年近く生活することにより、自律性や創意性の開発よりは、画一的思考に慣らされる

(表一)

また、「軍隊生活を通して、非合理、不条理を認めなければならないような状況に置かれた。社会的不正、腐敗、非合理ですら甘受しなければならないのか、と無気力になった」と、少なからぬ者が軍隊内での不条理や非合理性について語っていた。軍において何らかの非合理性や不条理を経験したり見たと話す者は多いが、彼等の大部分は、社会での手抜き工事や社会の非合理性さえも軍事文化の残滓であると考える傾向が強かった。これは長らく軍事独裁政権が続いたことによる、軍に対する否定的な見方からきている要素も大きい。軍服務が社会経験に乏しい若い時期に行われるため、その衝撃の度合いが大きく、実際以上に大きく記憶される傾向があるようである。

軍服務は、推進力や強い獲得指向意識を植え付けもする。「一度始めたら最後まで押し通す」「根っこを抜くまでやり遂げる」という言葉に表れているように、一旦始めたことは完遂するという推進力は、困難な仕事もやり遂げるという肯定的な結果をもたらすものの、時として短期間に結果や成果が出ることを要求する、短期成果主義的態度を養うこともあると多くの者が感じていた。

軍隊文化の持つ効率性、画一性、推進力など

が、それなりに社会的貢献を果たしたという肯定的側面は、多くの者が認めている。しかし、経済発展にともなう社会構造の変化により、軍事文化の長所を社会が必要とする時期は過ぎたと考えている者もまた多かった。

企業で働く除隊者の場合、ヌンチ〔相手の顔色を伺い、要領よく立ち回ること〕や、事勿れ主義的態度が染み付いたと認識している者が多かった。上司の前では自分の行動を適切に規制できるようになったというのである。下の者の意見を考慮せずにリーダーだけが単独で決定したことを、トップダウン式に命令し、無条件実行を要求する組織や、上司の命令に対する服従が要求される企業風土にあっては、このような能力は役に立っていると感じている者が多くみられた。

ある調査によれば、韓国企業のリーダーのうち、過半数が強者型リーダーであった〔52%〕¹¹⁾。強者型リーダーとは、部下がリーダーに従う動機が強圧による服従であり、リーダーの行動が、命令、懲戒、叱責、統制を伴い、権威主義的管理方法、服従などを重要な価値として強調し追求するリーダーのことを指す。

そのような垂直的な組織構造は、ある意味では軍隊組織の延長とみなすことができ、除隊者たち

はその意味において、組織への適応が容易であったと認識していた。だが、指示通りに仕事を推進する能力よりも、個人の個性や独創性が要求される時代へと転換しつつあり、韓国におけるリーダーの形態もまた、今後は統率型よりも、合意型のリーダーシップへと転換するものと思われる。

5. 結 び

軍服務は、自分自身を客観的に省み、漠然としていた自己の概念を構築する上でプラスになると思われる。また、人間関係においても、義理、協同心、ひいては他人に対する理解、同情、共感等の情緒的能力を発展させ、円滑な人間関係を維持する上で必要な技術、態度を習得させるという側面もあろう。軍隊は、協同心を重要な価値として強調し、作戦遂行、機動訓練、戦術教育から内務生活に至るまで、常に組織的に、集団で行動が、遂行させるためである。ただ、前述したように、兵役には、否定的な側面もみられるのもまた事実である。

また、伝統的に韓国社会でみられた協同心、集団意識、義理、目上に対する服従、序列意識、権威受容といった文化的特性が、軍組織の特性と相乗作用を起こすことにより、韓国の男性の意識に、より深く内面化されることがわかった。

軍隊経験が及ぼす影響はもちろん個人差があり、また、時代によっても異なるであろう。韓国が急速な経済発展遂げた70-80年代には、軍隊経験は、上の命令は何があってもやり遂げるといふ粘り強さにつながり、経済発展の原動力になったといえよう。また、反共政策が国家目標だった時期には、徴兵は、愛国心を高め、反共意識を強化する機能を果たした。兵役は、韓国社会において、それなりの長・短所を持ちながら今日に至っている。

大部分の韓国男性が軍隊経験を経るということ

から、軍服務は国民的一体感の形成に大きく寄与しており、韓国男性が社会生活を行っていく上で、引き続き影響を及ぼすものと思われる。

<註>

- 1) 健康な身体を有する中卒以上の男性は、18才以上になると徴兵検査を受け、軍隊に入隊する。入隊時期は人により異なり、遅くとも27才までには兵役の義務を果たさなければならない。徴兵期間は、例外的なケースを除いて2年2ヶ月であり、大部分は陸軍に入隊する。
- 2) 再社会化とは大きな転換、または社会的緊張の結果として、人格や態度が再構造化されることをいう。Anthony Giddens, *Sociology*, polity press, 1993, London, p. 101.
- 3) 大卒グループに限定した理由は、先行研究が分析しているように、高卒グループは大卒グループの比べ、軍隊経験やその影響に対する肯定度が高いという、軍隊経験に対する顕著な差がみられるからである。そのため、本研究では対象範囲を限定し、より正確なグループ性を明らかにするために、大卒のグループに照準をあて調査を行うことにした。
- 4) 現役兵の場合、基礎訓練を受けた後、各部隊に配属され、26ヶ月の軍隊生活を送る。
- 5) 防衛(短期)兵制度は、兵士の補充剰余資源の解消、および最小予算での人材活用のために1969年4月に創設された。軍部隊で、技術、行政要員として勤務したり、警察の支派出所、兵務官署、予備軍中隊などに派遣され、郷土防衛業務にあたる。防衛兵の徴兵期間は1年半と短く、多くは事務的な仕事に就き、自宅から通う。防衛兵に配属される場合は、主に健康上の理由や、父親が死亡した一人っ子、または両親が60才以上の一人っ子等の家庭事情がある場合である。なお、この制度は、兵役の不正など、様々な問題が提起され、1995年に廃止された。
- 6) KATUSAは、在韓米軍に増援、配属された韓国軍兵士のことである。KATUSAの設置根拠は、在韓米軍(米第8軍)規定第600の2に出ている。それによるとKATUSAは、「所属部隊の作戦能力を増進させるため、在韓米陸軍部隊に隷属し統合された韓国陸軍兵」と定義されている。KATUSAは、朝鮮戦争当時、不足した国連軍へ兵士を補充するために作られた制度である。日常勤務、訓練、外出、外泊、施設の利用において米軍兵士と

同じ待遇を受け、俸給、昇進、休暇、軍法、精神教育等は韓国軍の指揮下におかれる。選抜は、英語、韓国史、国民倫理の試験および面接によって選ばれる。合格者のほとんどは名門大学出身者が占めるが、競争率は何十倍にもなる。

KATUSA の指揮系統は米軍系統にあるが、KATUSA に関する行政・人事管理は韓国軍支援団長により韓国陸軍行政系統を通じて行われる。

- 7) 陸軍将校は、陸士、学軍 (ROTC)、学士、三士官出身将校等で構成されているが、ここでは学軍将校らを中心に将校集団の特徴と昇進を考察してみる。

ROTC は、毎年行われる試験によって選抜された学生を、大学3、4年時に所定の軍事訓練所で教育し、卒業時に少尉として任官させる制度である。入隊後は小隊長として30余名の部下を指揮統率する。この制度は1961年、米国の制度をモデルに、全国16の総合大学に設置され、現在に至るまで初級将校が毎年3,000~3,500人ずつ任官しており、現在までに10余万人以上の予備役および現役を輩出している。ROTC 出身予備役将校は、社会各層に地位を築いており、韓国社会のエリート層を形成している。

- 8) 80年代以前の韓国では、反米感情はそう大きなものではなかった。反米感情が表面化し始めたのは80年代になってからのことである。光州事件や、民主化運動、オリンピック開催などともなう国民的自尊心の高揚を契機に、韓国民は、従来の友好的な立場から、現実的、客観的な立場で米国を見るようになった。さらに、在韓米軍兵士の犯罪が根絶しないことも反米感情の一つの原因となっ

ている。

- 9) もちろん順機能的な側面も見うけられた。例えば、「米兵も結局同じ人間であるということがわかり、むしろ米国を感情的に促える見方は修復された」「合理的かつ民主的で、仕事の手順や物事の順序を重視する態度は、我々が学ぶべき点であった」「英語と米国人の考え方に慣れ、現在行っている貿易の仕事に非常に役立っている」などである。
- 10) 現役兵を虚脱させ、被害者意識を強める要因は、兵務の不正である。1995年度から防衛兵制度が廃止された理由は、不条理の解消および兵役の均衡性維持のためとされている。1990年の徴兵検査受験者の兵役処分をみると、合格者93.2%中、現役64.4%、補充役防衛招集対象27.6%、防衛招集免除1.2%であった。この統計を見る限り、合格者の約1/3は補充役として処置されることがわかる。補充役となる理由は様々であるが、身体等級に関係する場合に特に兵務の不正が実際に数多く行われていたことは、しばしば摘発される兵務の不正に関する報道を見ても明らかである。
- 兵務庁は1992年に、創設23年目にして初めて兵務の不正ゼロを記録したと発表した。これは、徴兵検査の科学的処理化と検査過程の公開化により可能になったといわれている。兵務の不条理ゼロが創設23年目の出来事であるというのは、それほど不正の追放が困難であったということをも物語っている。しかし、完全に不正を防げるのかという疑問が今なお残る。
- 11) ラッキー金星研究所と毎日経済新聞が、国内企業1,000社を対象に行った調査結果。毎日経済新聞1994年10月11日。

参考文献

(韓国語文献)

- カンジェソク 1992「軍組織成員の形式主義的形態に関する研究」国防大学院修士学位論文
 高麗大学校行動科学研究所 1978「軍服務が国家・社会観定立に与える影響」高麗大学校ジョンフン第6巻、第1号
 金ドンヒョン・ベクジョンチャン・洪ドゥスン・金ウフェ 1985「軍服務経験が国民意識に与える影響分析」現代社会研究所
 金マンギ、チェジョンテ 1990「社会発展と職業軍人」韓国国防研究院
 金マンジュ 1989「軍生活が地域感情に与える影響」中央大学校社会開発大学院社会学科修士論文
 金ジュンギユ 1981「軍構成員の価値観に関する研究」延世大学校教育学科修士論文
 金ジュンダル 1987「韓国軍組織の集団力学的研究」慶南大学行政学科修士論文
 文ヨンリン 1991「学校教育と軍隊教育の連係性」青年研究第14集、ユネスコ韓国委員会
 ベクジソン 1981「軍生活の教育的機能に関する研究」延世大学校教育学科修士論文
 シムシノ 1993「韓国軍軍隊教育の編纂過程と社会的寄与に関する研究」高麗大学校教育学科修士論文
 シムジンソプ 1988「韓国軍歩兵小隊長のリーダーシップ特性に関する研究」高麗大学校心理学科修士論文

- ヨンドジュン 1985「軍組織の指導性に関する研究」高麗大学校教育学科修士論文
李ドンフン 1995「韓国軍隊文化研究」韓国社会学第29集、春号、韓国社会学会
李ドンヒ 1972「軍隊文化に関する研究」ソンゴク論綜3、ソンゴク
李チョルヒ 1991「服務青少年に対する関心と転換」青年研究 第14集、ユネスコ韓国委員会
チャンヨンソン 1991「軍服務が青少年に与える影響」青年研究 第14集、ユネスコ韓国委員会
チヨンソンミン 1991「服務青少年の服務意識と欲求」青年研究 第14集、ユネスコ韓国委員会
チェソンウォン 1982「軍教育と社会発展」国民大学校政治外交学科修士論文
花郎台研究所 1990「社会の民主過程における韓国軍の位相定立に関する研究」花郎台研究所
ベクジョンチャン・オムマングム・金ヨンホ 1994『韓国軍隊と社会』ナナム
カンソンチョル 1988『駐韓米軍』イルソンジョン
コヨンボク 1991『韓国社会の構造と意識』社会文化研究所
金ナングク 1995『国民の軍隊彼らの軍隊』プルピ
金スンヒョン 1990『軍事文化』ウルチ書籍
金ヨンミョン編 1986『軍部政治論』図書出版ノクト
金ジェフン 1994『軍』〔1〕、〔2〕東亜日報社
金ジンユ 1992『韓国人の反米感情』イルチョガク
金テクジュ 1989『兵営生活を通じた生活創造』ウソク
ベクチョンジャン 1992『韓国軍と国家発展』陸軍士官学校花郎台研究所
ソウル経済新聞社特別取材班 1992『韓国の人脈』韓国日報社
ヤンヒミン 1988『軍隊文化の根』ハフォン
ウォンジョンロク 1993『兵営25時』世紀文化社
李シノ 1992『韓国軍、何が問題なのか』パルボウォン
李シンイル 1990『軍部理論と軍部政治』キョハク研究社
チェボンヨン 1994『韓国人の社会的性格』スタナム
チェジェソク 1992『韓国人の社会的性格』ケムン社
韓国政治学会編 1989『韓国政治の民主化』法文社
ハンサンジン 1988『韓国社会の官僚的権威主義』文学と知性社
洪ドゥスン 1993『韓国軍隊の社会学』ナナム
アンギソク・チェソンヨン 1988「駐韓米軍40年」月刊新東亜7月号
延世29集 1989「軍入隊にあたって」1989延世大学校
呉フングン 1988「清算すべき軍事文化」月刊中央8月号
李サンウ 1988「創軍40年、韓国の軍部」月刊新東亜、10月号
国防部政策企画室 1990-1995『国防白書』国防部
Alex Inkeles & Daniel J. Levinson, 1977, "National Character: the Study of Modal Personality and Sociocultural Systems"
Social Psychology, Addison-Wesley.
Anthony Giddens, 1993, *SOCIOLOGY*, Polity Press.
Goffman E, 1959, *The Presentation of self in everyday Life*, New York, Doubleday Anchor. Jerome B. Dusek, 1987, *Adolescent
Development and behavior*, Syracuse University, Prentice-Hall International, Inc.
Mead, G. H, 1934, *Mind Self and Society*, Merrell, C. W. ed. The University of Chicago press.
Morris Janowitz, 1974, *Sociology and The military establishment*, SAGE publications, London.
Morris Janowitz, 1967, *The Military in the political Development of New nations in Wilson C. McWilliam (ed.)*, Gansons and
Government: *Politics and Military in New State*, San Francisco: Chandler.
Nancy L. Goldman and David R. Segal, Editors, 1976, *The Social Psychology of Military Service*, SAGE Research progress series
on war, revolution, and peacekeeping Volume VI, London.
Niklas Luhmann, 1964, *Funktionen und Folgen formaler Organisation*, Duncker & Humblot, Berlin Rupert Brown, 1988,
Group Processes—dynamics within and between groups, Oxford: Basil Blackwell
William J. Mcguire, 1977, *The nature of Attitude and Attitude Change*, Social Psychology, University of Texas.

- 大江志ノ夫 1981『徴兵制』岩波書店
飯塚浩二 1991『日本の軍隊』岩波書店
前田哲男 1994『日本の軍隊（上）』現代書館
吉見義明 1987『草の根ファシズム』東京大学出版会
戸部良一 1998『日本の近代—逆説の軍隊』中央公論社
松下芳夫 1980『日本軍事史』土屋書店
後藤総一郎 1988『天皇制国家の形成と民衆』恒文社
松本和良 1993『組織体系の社会学』学文社
阿部知二 1969『良心的兵役拒否の思想』岩波書店
藤沢房俊 1993『クォーレの時代』ちくまライブラリー
宅間武俊 1993『青年の心理』培風館